

令和元年度 病院情報の公表の集計条件等について

1. 目的

病院情報の公開について、以下の通り目的を設定する。

- ・ 医療機関の DPC データの質の向上
- ・ 医療機関の DPC データの分析力と説明力の向上

2. 集計項目

- 1) 年齢階級別退院患者数
- 2) 診断群分類別患者数等（診療科別患者数上位 5 位まで）
- 3) 初発の 5 大癌の UICC 病期分類別ならびに再発患者数
- 4) 成人市中肺炎の重症度別患者数等
- 5) 脳梗塞の患者数等
- 6) 診療科別主要手術別患者数等（診療科別患者数上位 5 位まで）
- 7) その他（DIC、敗血症、その他の真菌症および手術・術後の合併症の発生率）

3. 集計条件および集計方法

《共通項目》

- 使用するデータ
 - ◇ 様式 1
 - ◇ 様式 4
 - ◇ D ファイル
- 集計条件
 - ◇ 様式 1
 - ・ 平成 30 年 4 月 1 日から平成 31 年 3 月 31 日までの退院患者であり、一般病棟に 1 回以上入院した患者
 - ・ 入院した後 24 時間以内に死亡した患者又は生後 1 週間以内に死亡した新生児は集計対象外
 - ・ 臓器移植（『厚生労働大臣が指定する病院の病棟における療養に要する費用の額の算定方法の一部を改正する件（平成 30 年厚生労働省告示第 68 号）』に規定）は集計対象外。
 - ◇ 様式 4
 - ・ 医科レセプトのみもしくは歯科レセプトありの患者

■ 集計方法

単に数値を示すだけでなく、「医業若しくは歯科医業又は病院若しくは診療所に関する広告等に関する指針（以下「医療広告ガイドライン」という。）」に定められた範囲内で特性等について必要にして十分な解説を行う。

医療広告ガイドラインは下記ウェブサイトにて入手可能であるので適宜参照されたい。

<別紙 3（医療広告ガイドライン）>

<https://www.mhlw.go.jp/file/06-Seisakujouhou-10800000-Iseikyoku/0000209841.pdf>

◇ 患者数

- ・ 親様式のみを用いてカウントした患者数とする
 - 統括診療情報番号が「0」で、様式1の病棟に関するフラグにおいて、「調査対象となる一般病棟への入院の有無」が「1」のレコードを1患者としてカウント。（統括診療情報番号がAおよびBのレコードは除外）
※（7）は例外とし、子様式がある場合は子様式を用いて集計を行うこと（個別項目参照）
- ・ 10未満の数値の場合は、－（ハイフン）を記入。
 - 例えば、「2）診断群分類別患者数等（診療科別患者数上位5位まで）」において、患者数が10未満の場合は、「患者数」にはハイフンを入力し、「平均在院日数（全国）」以外の項目にも、同様にハイフンを入力する。

◇ 在院日数

- ・ 在院日数は、親様式の様式1開始日から様式1終了日までの日数とする
平成30年4月1日に入院し、平成30年4月2日に退院した患者の在院日数は2日である。

《個別項目》

1) 年齢階級別退院患者数

- ・ 一般病棟の年齢階級別(10歳刻み)の患者数を示す。
- ・ 年齢は、親様式における様式1開始日時点とする。
- ・ 年齢階級は90歳以上を1つの階級として設定する。

2) 診断群分類別患者数等（診療科別患者数上位 5 位まで）

各診療科別に患者数の多い DPC14 桁分類について DPC コード、名称、患者数、自院の平均在院日数、全国の平均在院日数、転院率、平均年齢、患者用パス（任意）、解説を示す。

- ・ D ファイルの「D5 データ区分」が「93」であるレコードにおける「D29 分類番号」を DPC コードとして用い、様式 1 と D ファイルを結合して集計する。D ファイルにおいて、1 患者で複数の DPC コードがある場合は、D ファイルの DPC コード（D29 分類番号）から直近のものを採用する。
- ・ 自院ホームページに掲載する際の診療科名は、現在、医療法施行令（昭和 23 年政令第 326 号）第 3 条の 2 第 1 項の規定に基づき広告することができる診療科名を使用する。
- ・ 一般病棟の中における転科においては、主たる診療科は医療資源を最も投入した傷病の担当医が所属する科で集計。
- ・ 同じ疾患に対し複数科で診療を行った場合も、様式 1 に登録されている診療科（医療資源を最も投入した傷病の診療を担当した医師の所属する診療科）で集計。
※医療法に基づいて標榜している診療科名を採用するため、様式 1 に登録されている診療科で集計した後に変換が必要。公開する時は必ず標榜している診療科名を表示し、変換元の様式 1 診療科コード（複数診療科を合算する場合は半角セミコロン” ; ” で区切って列記）を、表示されない形式で公開ページに埋め込む。（公開ページへの記述方法は別紙参照。）
例) × 肛門科 210 → ○肛門外科 210
- ・ 平成 30 年度の DPC コード別の平均在院日数（全国値）は、現時点では公表されていないため、平均在院日数の全国値が記載された Excel ファイルの数値（後日公表）を使用する。
- ・ 「転院」については、退院先が「4 他の病院・診療所への転院」とし、転院患者数 / 全退院数を転院率とする。
- ・ 各 DPC コードに対する名称に関しては、DPC 分類における名称に限らず、原則として患者や住民に分かりやすい名称を付けてよい。
- ・ 患者用パスを公開したい場合は、リンクを設けることも可能。リンクを設けない場合、表中の当該欄は空欄とする。
- ・ 上位 3 位以内に患者数が 10 件を超える診療科の場合は 3 位までは公開必須となるが、4 位、5 位については公開を任意とする。この際、4 位と 5 位を公開しない場合については当該箇所を「-」で表示する。また、公開する場合は患者数 10 件以上の順位のものすべて公開するものとし、4 位を公開せず 5 位を公開する、といったことは認められない。
- ・ D ファイルの作成がなく、DPC ごとの集計ができない場合、指標の表は掲載せず、掲載がない理由の解説のみ表示する。

3) 初発の5大癌のUICC病期分類別ならびに再発患者数

- ・ 5大癌について初発患者はUICCのTNMから示される病期分類による患者数を、再発患者（再発部位によらない）は期間内の患者数とする。
- ・ 患者数は延患者数とする。
 - 例えば一連の治療期間に入退院を繰り返すなどを行った場合は、同一患者に入退院を繰り返した回数分をかけた延患者とする。
- ・ 様式1の項目「がん患者/初発・再発」が0（初発）かつ医療資源を最も投入した傷病名に対するICD-10(2013年版、以降ICD10とする)が、胃癌の場合はC16\$、大腸癌の場合はC18\$・C19・C20、乳癌の場合はC50\$、肺癌の場合はC34\$、肝癌の場合はC22\$における各患者数をカウントする。（注：治療前に得られたTNM分類情報と医療資源を最も投入した傷病名が必ずしも紐づかない場合もある。）

	がん患者/初発・再発	医療資源を最も投入した傷病名に対するICD10
胃癌	0（初発）	C16\$
大腸癌		C18\$・C19・C20
乳癌		C50\$
肺癌		C34\$
肝癌		C22\$

- ・ 参考資料のUICC TNM分類の病期（Stage）マトリクスを参考にし、5大癌のStage IからIVの患者数を入力。
- ・ 各癌それぞれについて、Stageの判定（UICC病期分類及びに癌取扱い規約）に使用した版数を入力。同癌のうち複数の版数が混在する場合は、カンマ区切りを用いて列記すること。
- ・ 大腸癌と肝癌については、様式1の「癌取扱い規約に基づくがんのStage分類」を利用しても構わない。その際、UICC病期分類か「癌取扱い規約」かがわかるよう病期分類列に、UICC病期分類の場合「1」を、「癌取扱い規約」の場合「2」を入力のこと。
- ・ TNM分類が不正確等で病期（stage）が不明な場合は、「不明」としてカウントする。
- ・ Stageが「0」のものは集計対象外とする。

4) 成人市中肺炎の重症度別患者数等

- ・ 成人の市中肺炎（平成 30 年度様式 1 の「肺炎の重症度分類」の 7 桁目=5 に相当）につき、重症度別に患者数、平均在院日数、平均年齢を示す。
- ・ 入院の契機となった傷病名および医療資源を最も投入した傷病名に対する ICD10 コードが J13~J18\$ で始まるものに限定する。
- ・ 重症度分類は、A-DROP スコアを用い、軽症~超重症の 4 段階で表記する。重症度分類の各因子が一つでも不明な場合は「不明」と分類する。重症度の計算には年齢・性別因子を考慮すること。

Age（年齢）	男性 70 歳以上、女性 75 歳以上
Dehydration（脱水）	BUN 21mg/dL 以上または脱水あり
Respiration	SpO ₂ ≤90%（PaO ₂ 60Torr 以下）
Orientation（意識障害）	意識障害あり
Pressure（収縮期血圧）	収縮期血圧 90 mmHg 以下

※5 点満点で、1 項目該当すれば 1 点、2 項目該当すれば 2 点。

軽症：0 点の場合。

中等症：1~2 点の場合。

重症：3 点の場合。

超重症：4~5 点の場合。ただし、ショックがあれば 1 項目のみでも超重症とする。

不明：重症度分類の各因子が 1 つでも不明な場合。

5) 脳梗塞の患者数

- ・ 脳梗塞の患者数、平均在院日数、平均年齢、転院率を示す。
- ・ 医療資源を最も投入した傷病の ICD10 が I63\$ である症例を集計する。
- ・ 発症日から「3 日以内」「その他」に分けた数値を記載する。発症日から「3 日以内」「その他」に分けて 10 未満になることが多い場合、分けずに合計した数値を記載する。
 - 「3 日以内」「その他」とその「合計値」を記載する場合、10 未満の数値が推計できないよう注意すること。
- ・ 「転院」については、退院先が「4 他の病院・診療所への転院」とし、転院患者数 / 全退院数を転院率とする。

6) 診療科別主要手術別患者数等（診療科別症例数上位5位まで）

- ・ 同一手術において複数の手術手技を行った場合、主たるもののみカウントする。具体的には、平成30年度「DPC導入の影響評価に係る調査」実施説明資料で「入院中に複数の手術を行った場合は、「連番」を利用して複数行に記入をする。その際は主たる手術（又は点数の最も高い手術）を連番1に入力する」と記載されているとおり、連番1の手術をカウントする。複数の診療科に転科している患者がそれぞれの科で手術を行った場合は、様式1にある「医療資源を最も投入した傷病名」の診療科として、主たる手術のみをカウントする。
- ・ 診療科別に手術件数の多い順に5術式について、患者数、術前日数、術後日数、転院率、平均年齢及び患者用パス（任意）を示す。
- ・ 輸血関連（K920\$）は除外。
- ・ 創傷処理、皮膚切開術、非観血的整復術、徒手整復術、軽微な手術（下表を参照）、およびすべての加算は除外。
- ・ 術前日数は様式1開始日から主たる手術の手術日まで（手術日当日は含まない）の日数、術後日数は主たる手術の手術日から（手術日当日は含まない）様式1終了日まで。
- ・ 「転院」については、退院先が「4他の病院・診療所への転院」とし、転院患者数／全退院数を転院率とする。
診療科名は「2）診断群分類別患者数等（診療科別患者数上位5位まで）」と同様の取扱いとする。
- ・ 上位3位以内に患者数が10件を超える診療科の場合は3位までは公開必須となるが、4位、5位については公開を任意とする。この際、4位と5位を公開しない場合については当該箇所を「-」で表示する。また、公開する場合は患者数10件以上の順位のものすべてを公開するものとし、4位を公開せず5位を公開する、といったことは認められない。

【軽微な手術リスト】

Kコード	診療行為名称
K0001	創傷処理（筋肉、臓器に達するもの（長径5cm未満））
K0002	創傷処理（筋肉、臓器に達するもの（長径5cm以上10cm未満））
K0003	創傷処理（筋肉、臓器に達するもの（長径10cm以上））
K0004	創傷処理（筋肉、臓器に達しないもの（長径5cm未満））
K0005	創傷処理（筋肉、臓器に達しないもの（長径5cm以上10cm未満））

K0006	創傷処理（筋肉、臓器に達しないもの（長径 10cm 以上））
K000-21	小児創傷処理（6 歳未満）（筋肉、臓器に達するもの（長径 2.5cm 未満））
K000-22	小児創傷処理（6 歳未満）（筋肉、臓器に達するもの（長径 2.5cm 以上 5 cm 未満））
K000-23	小児創傷処理（6 歳未満）（筋肉、臓器に達するもの（長径 5 cm 以上 10cm 未満））
K000-24	小児創傷処理（6 歳未満）（筋肉、臓器に達するもの（長径 10cm 以上））
K000-25	小児創傷処理（6 歳未満）（筋肉、臓器に達しないもの（長径 2.5cm 未満））
K000-26	小児創傷処理（6 歳未満）（筋肉、臓器に達しないもの（長径 2.5cm 以上 5 cm 未満））
K000-27	小児創傷処理（6 歳未満）（筋肉、臓器に達しないもの（長径 5 cm 以上 10cm 未満））
K000-28	小児創傷処理（6 歳未満）（筋肉、臓器に達しないもの（長径 10cm 以上））
K0011	皮膚切開術（長径 10cm 未満）
K0012	皮膚切開術（長径 10cm 以上 20cm 未満）
K0013	皮膚切開術（長径 20cm 以上）
K0441	骨折非観血的整復術（肩甲骨、上腕、大腿）
K0442	骨折非観血的整復術（前腕、下腿）
K0443	骨折非観血的整復術（鎖骨、膝蓋骨、手、足その他）
K0611	関節脱臼非観血的整復術（肩、股、膝）
K0612	関節脱臼非観血的整復術（胸鎖、肘、手、足）
K0613	関節脱臼非観血的整復術（肩鎖、指（手、足）、小児肘内障）
K0621	先天性股関節脱臼非観血的整復術（両側）（リーメンビューゲル法）
K0622	先天性股関節脱臼非観血的整復術（両側）（その他）
K117	脊椎脱臼非観血的整復術
K117-2	頸椎非観血的整復術
K117-3	椎間板ヘルニア徒手整復術
K121	骨盤骨折非観血的整復術
K333-3	鼻骨骨折徒手整復術
K428	下顎骨折非観血的整復術
K430	顎関節脱臼非観血的整復術
K432	上顎骨折非観血的整復術

7) その他（DIC、敗血症、その他の真菌症および手術・術後の合併症の発生率）

- ・ 「DIC 発生率の症例数」を算出する場合は、子様式がある場合は子様式を用いて症例数をカウント。具体的には、様式 1 の病棟に関するフラグにおいて、「調査対象となる一般病棟への入院の有無」が「1」、かつ「調査対象となる精神病棟への入院の有無」が「0」、かつ「調査対象となるその他の病棟への入院の有無」が「0」のレコードを 1 症例としてカウント。

- ・ 様式1の精度向上を図るために、個々の様式1（子様式がある場合は子様式）の医療資源を最も投入した傷病名が播種性血管内凝固症候群(DPC6 桁 130100)、敗血症(DPC6 桁 180010)、その他の真菌感染症(DPC6 桁 180035)、手術・処置等の合併症(DPC6 桁 180040)について、入院の契機となった傷病名(DPC6 桁レベル)の同一性の有無を区別して症例数をカウントする。同一性の有無とは、上記4つの医療資源を最も投入した傷病名の症例(DPC6 桁レベル)について、様式1の入院の契機となった傷病名に対するICD10コードが、下記表の医療資源を最も投入した傷病名に対応するICD10コードに該当している場合は「同一」とする。同一性の有無を区別した各症例数（個々の様式1ベース）の、全退院患者数に対する発生率を示す。
- ・ 手術・処置等の合併症について、その内訳を説明に記す。

医療資源を最も投入した傷病名	対応する ICD10 コード
播種性血管内凝固症候群(DPC6 桁 130100)	D65
敗血症(DPC6 桁 180010)	A021 A327 A391 A392 A393 A394 A395 A398 A399 A40\$ A41\$ B007 B250 B252 B376 B377 B387 B393 B407 B417 B427 B447 B464
その他の真菌感染症(DPC6 桁 180035)	A43\$ A44\$ B35\$ B36\$ B370 B372 B373 B374 B378 B379 B380 B381 B382 B383 B388 B389 B390 B391 B392 B394 B395 B399 B400 B401 B402 B403 B408 B409 B410 B418 B419 B420 B421 B428 B429 B430 B432 B438 B439 B448 B449 B451 B452 B453 B457 B458 B459 B460 B461 B462 B463 B465 B468 B469 B47\$ B48\$ B49
手術・処置等の合併症(DPC6 桁 180040)	T80\$ T81\$ T820 T822 T823 T824 T825 T826 T827 T828 T829 T83\$ T84\$ T850 T851 T853 T854 T855 T856 T857 T858 T859 T87\$ T880 T881 T882 T883 T884 T885 T886 T888 T889

4. 公表ページの作成手順

別紙を参照のこと。

5. 医療広告ガイドラインについて

医療機関のホームページに集計項目の結果を「病院情報の公表」として公開するにあたっては、医療広告ガイドラインを遵守すること。

なお、集計条件については医療広告ガイドラインに準ずること。

また、医療広告ガイドラインを遵守していることを明らかにするため、公表ページにおいて、医療広告の関連資料が掲載されている厚生労働省ホームページ「医療法における病院等の広告規制について」

https://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/kenkou_iryuu/iryuu/kokokukisei/

をリンク先として示し、当該ガイドライン等を遵守している旨を示すこと。

※関連資料

<別紙 1 (改正省令) >

<https://www.mhlw.go.jp/file/06-Seisakujouhou-10800000-Iseikyoku/0000205360.pdf>

<別紙 2 (改正告示) >

<https://www.mhlw.go.jp/file/06-Seisakujouhou-10800000-Iseikyoku/0000205361.pdf>

<別紙 3 (医療広告ガイドライン) >

<https://www.mhlw.go.jp/file/06-Seisakujouhou-10800000-Iseikyoku/0000209841.pdf>

<医業若しくは歯科医業又は病院若しくは診療所に関する広告等に関する指針 (医療広告ガイドライン) 等について (通知) (平成 30 年 5 月 8 日付け医政発 0508 第 1 号) >

<https://www.mhlw.go.jp/file/06-Seisakujouhou-10800000-Iseikyoku/0000205359.pdf>

<別添 (医療広告ガイドラインに関する Q&A) >

<https://www.mhlw.go.jp/content/000371812.pdf>

【参考資料】 癌取扱い規約に基づくがんの Stage 分類について

(出典：平成 30 年度「DPC 導入の影響評価に係る調査」実施説明資料より抜粋)

取扱い規約	版	部位	Stage 分類
大腸癌取扱い規約	8	結腸・直腸	0
			I
			II
			III NOS
			III A
			III B
			IV
原発性肝癌取扱い規約	6	肝細胞癌	I
			II
			III
			IV NOS
			IV A
			IV B
			IV B
		肝内胆管癌	I
			II
			III
			IV NOS
			IV A
			IV B
			IV B

【参考資料】UICC TNM 分類の病期 (Stage) について

(出典：「国立がん研究センターがん情報サービス 『がん登録・統計』 院内がん登録実務者のためのマニュアル 部位別テキスト 胃・大腸・肝・肺・乳腺より抜粋：
https://ganjoho.jp/reg_stat/can_reg/hospital/info/doc/manual.html)

① 胃癌

5. 病期分類と進展度

1) UICC TNM 分類(第8版)

T-原発腫瘍【510】【610】

原発腫瘍の壁深達度を評価する。

m, sm などの記号で表記されていることも多い。

内視鏡所見や病理所見をもとに、壁深達度を評価した上で、表4を参考に、T分類を決定する。

T1a 粘膜(m)

粘膜上皮 上皮内癌の表記がある場合はT1a*

粘膜固有層

粘膜筋板

T1b 粘膜下層(sm)

T2 固有筋層(mp)

T3 漿膜下層(ss)

T4a 漿膜を貫通(se)

T4b 隣接構造に浸潤(si)

1 胃の隣接構造とは脾、横行結腸、肝、横膈膜、脾、腹壁、副腎、腎、小腸(十二指腸を除く)、後腹膜を指す。

2 胃から十二指腸や食道に浸潤が及んでいる場合には、これらの中で最も深い深達度により分類する。

3 胃結腸間膜内、肝胃間膜内、または大網や小網内に進展する腫瘍で、臓膜腹膜の穿孔を伴わない場合はT3に分類する。

※ わが国の院内がん登録では、上皮内癌(Tis)は用いず、病理所見などで上皮内癌(Tis)と確認できれば、T1aとして登録する。表4を参考に、T分類を決定する。

表4 壁深達度とUICC T分類との関係

壁深達度	UICC T分類【第8版】
m	T1a
sm	T1b
mp	T2
ss	T3
se	T4a
si	T4b

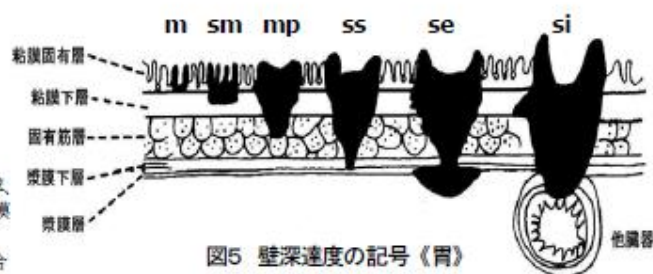


図5 壁深達度の記号《胃》

N-領域リンパ節転移【520】【620】

原発部位が、胃食道接合部である場合とそれ以外で分けて、表5を参考に領域リンパ節への転移の個数を評価する。
超音波内視鏡所見やCT所見などの画像診断所見をもとに、領域リンパ節転移を評価する。個数が不明の場合は、1カ所に少なくとも1個と判断して個数をカウント。

- N0** 領域リンパ節転移なし
- N1** 1～2個の領域リンパ節転移
- N2** 3～6個の領域リンパ節転移
- N3** 7個以上の領域リンパ節転移
 - N3a** 7～15個の領域リンパ節転移
 - N3b** 16個以上の領域リンパ節転移

M-遠隔転移【530】【630】

画像所見(CT/MRI、超音波検査)等から遠隔転移を評価する。
胃癌においては、肝転移(取扱い規約表記: H1)、腹膜転移(P1)以外にも、手術が行われた場合の腹腔洗浄細胞診(CY1)が陽性の場合も遠隔転移として扱う。

- M0** 遠隔転移なし
- M1** 遠隔転移あり

表5 領域リンパ節と取扱い規約の領域リンパ節《胃》

亜部位	UICC TNM 分類での領域リンパ節名		取扱い規約【第15版】	
胃食道接合部癌(C16.0)	右噴門	#1	右噴門	
	左噴門	#2	左噴門	
	左胃動脈	#7	左胃動脈幹	
	腹腔動脈	#9	腹腔動脈周囲	
	横隔膜下	#19	横隔膜下	
	横隔膜上下に含まれる	#20	食道裂孔部	
	下部縦隔傍食道	#110	胸部下部傍食道	
	横隔膜上	#111	横隔膜上	
	胃食道接合部癌以外(C16.1～C16.9)	右噴門	#1	右噴門
		左噴門	#2	左噴門
		小彎	#3	小彎
大彎		#4	大彎	
幽門上		#5	幽門上	
幽門下		#6	幽門下	
左胃動脈		#7	左胃動脈幹	
総肝動脈		#8	総肝動脈	
腹腔動脈		#9	腹腔動脈周囲	
脾門		#10	脾門	
脾動脈幹		#11	脾動脈幹	
肝十二指腸韧带		#12	肝十二指腸間膜内	
幽門下の一部		#14v	腸間膜内(上腸間膜前部含む)	

表 UICC TNM 分類【第8版】病期(Stage)のマトリクス《胃》

臨床病期					
TNM 分類第8版(cステージ)	N0	N1	N2	N3a	N3b
T1a	I	IIA	IIA	IIA	IIA
T1b	I	IIA	IIA	IIA	IIA
T2	I	IIA	IIA	IIA	IIA
T3	II B	III	III	III	III
T4a	II B	III	III	III	III
T4b	IVA	IVA	IVA	IVA	IVA
M1	IVB	IVB	IVB	IVB	IVB

病理学的病期

TNM 分類第 8 版 (p ステージ)	N0	N1	N2	N3a	N3b
T1a	I A	I B	II A	II B	III B
T1b	I A	I B	II A	II B	III B
T2	I B	II A	II B	III A	III B
T3	II A	II B	III A	III B	III C
T4a	II B	III A	III A	III B	III C
T4b	III A	III B	III B	III C	III C
M1	IV	IV	IV	IV	IV

② 大腸癌

5. 病期分類と進展度

1) UICC TNM 分類(第8版)

T-原発腫瘍【510】【610】

()内には取扱い規約第8版の壁深達度を付記

原発腫瘍の壁深達度を評価する。

m, sm などの記号で表記されていることも多い。

内視鏡所見や病理所見をもとに、壁深達度を評価した上で、表4を参考に、T分類を決定する。

- Tis¹ 上皮内腫瘍または粘膜固有層に浸潤 (M)
- T1 粘膜下層(SM)
- T2 固有筋層(MP)
- T3 漿膜下層(SS)、または漿膜被覆のない結腸あるいは直腸の周囲組織(A)
- T4a 臓側腹膜を貫通(SE)
- T4b 隣接臓器に浸潤(SI, AI)²

1 Tisは癌細胞が粘膜固有層(粘膜内)に限局し、粘膜筋板から粘膜下層への進展を伴わない。

2 内視鏡的、他の臓器または構造に癒着している腫瘍は、cT4bに分類する。しかし、顕微鏡的に癒着部に腫瘍が認められない場合は解剖学的な壁浸潤深達度によってpT1~3に分類する。

表4. 壁深達度と UICC T 分類との関係

壁深達度	UICC T 分類【第8版】
M	Tis
SM	T1
MP	T2
SS,A	T3
SE	T4a
SI, AI	T4b

N-領域リンパ節【520】【620】

原発部位が、どの亜部位かで分けて、表5を参考に領域リンパ節への転移の個数を評価する。

超音波内視鏡所見やCT所見などの画像診断所見をもとに、領域リンパ節転移を評価する。個数が不明の場合は、1カ所に少なくとも1個と判断して個数をカウント。

- N0 領域リンパ節転移なし
- N1 1-3 個の領域リンパ節転移
 - N1a 1 個の領域リンパ節転移
 - N1b 2-3 個の領域リンパ節転移
 - N1c Tumor Deposits^注
- N2 4 個以上の領域リンパ節転移
 - N2a 4-6 個の領域リンパ節転移
 - N2b 7 個以上の領域リンパ節転移

注: 漿膜下層または漿膜被覆のない傍結腸・傍直腸結合組織に衛星結節(Deposits)が存在し、領域リンパ節転移がない場合をいう



図4 Tumor deposits

M-遠隔転移【530】【630】

- M0 遠隔転移なし
- M1 遠隔転移あり
 - M1a 1 臓器(肝臓、肺、卵巣、領域リンパ節以外のリンパ節)に限局する転移
 - M1b 2つ以上の臓器への転移
 - M1c 他の臓器への転移の有無にかかわらず腹膜への転移

表5-1 UICC 第8版と取扱い規約のリンパ節対応表《結腸および直腸》

取扱い規約		UICC TNM 分類(8版) 領域リンパ節					
リンパ節名称	番号	虫垂	盲腸	上行結腸	肝曲	横行結腸	脾曲
		回結腸	回結腸 右結腸	回結腸 右結腸 中結腸	右結腸 中結腸	右結腸、中結腸 左結腸、下腸間膜	中結腸 左結腸 下腸間膜
結腸傍リンパ節	201	領域	領域	領域			
	211		領域	領域	領域	領域	
	221			領域	領域	領域	領域
回結腸リンパ節	202	領域	領域	領域			
右結腸リンパ節	212		領域	領域	領域	領域	
中結腸リンパ節右枝	222r			領域	領域	領域	領域
中結腸リンパ節左枝	222l			領域	領域	領域	領域
回結腸根リンパ節	203	領域	領域	領域			
右結腸根リンパ節	213		領域	領域	領域	領域	
中結腸根リンパ節	223			領域	領域	領域	領域
上腸間膜根リンパ節	214						
大動脈周囲リンパ節	216						
脾門下リンパ節	206						
胃大静脈リンパ節	204						
脾門リンパ節	210						
結腸傍リンパ節	231					領域	領域
	241-1						
	241-2						
	241-t						
直腸傍リンパ節	251						
左結腸リンパ節	232					領域	領域
S 状結腸リンパ節	242-1						
	242-2						
下腸間膜幹リンパ節	252						
下腸間膜根リンパ節	253					領域	領域
大動脈周囲リンパ節	216						

表5-2 UICC 第8版と取扱い規約のリンパ節対応表《結腸および直腸》

取扱い規約		UICC TNM 分類(8版) 領域リンパ節		
リンパ節名称	番号	下行結腸	S 状結腸	直腸
		左結腸 下腸間膜	左結腸、下腸間膜 S 状結腸、直腸 S 状結腸 上直腸	下腸間膜、上直腸、中直腸 下直腸、内腸骨、直腸間膜(直腸後) 外側仙骨、仙骨前、仙骨岬(Garota)
結腸傍リンパ節	231	領域	領域	
	241-1		領域	
	241-2		領域	
	241-t		領域	
直腸傍リンパ節	251		領域	領域
左結腸リンパ節	232	領域	領域	
S 状結腸リンパ節	242-1		領域	
	242-2		領域	
下腸間膜幹リンパ節	252		領域	領域
下腸間膜横リンパ節	253	領域	領域	領域
大動脈周囲リンパ節	216			
直腸傍リンパ節	251		領域	領域
右内腸骨中極リンパ節	263Pt			領域
左内腸骨中極リンパ節	263Pl			領域
右内腸骨末梢リンパ節	263Dt			領域
左内腸骨末梢リンパ節	263Dl			領域
右腸鎖リンパ節	283rt			
左腸鎖リンパ節	283rl			
右総腸骨リンパ節	273rt			
左総腸骨リンパ節	273rl			
右外腸骨リンパ節	293rt			
左外腸骨リンパ節	293rl			
右外側仙骨リンパ節	260rt			領域
左外側仙骨リンパ節	260rl			領域
正中仙骨リンパ節	270			領域
大動脈分岐部リンパ節	280			領域
右米径リンパ節	292rt			
左米径リンパ節	292rl			

表 UICC TNM 分類【第 8 版】病期(Stage)のマトリクス《結腸および直腸》

UICC TNM8 (結腸・直腸)	N0	N1a	N1b	N1c	N2a	N2b
Tis	0					
T1	I	ⅢA	ⅢA	ⅢA	ⅢA	ⅢB
T2	I	ⅢA	ⅢA	ⅢA	ⅢB	ⅢB
T3	ⅡA	ⅢB	ⅢB	ⅢB	ⅢB	ⅢC
T4	Ⅱ					
T4a	ⅢB	ⅢB	ⅢB	ⅢB	ⅢC	ⅢC
T4b	ⅢC	ⅢC	ⅢC	ⅢC	ⅢC	ⅢC
M1	Ⅳ	Ⅳ	Ⅳ	Ⅳ	Ⅳ	Ⅳ
M1a	ⅣA	ⅣA	ⅣA	ⅣA	ⅣA	ⅣA
M1b	ⅣB	ⅣB	ⅣB	ⅣB	ⅣB	ⅣB
M1c	ⅣC	ⅣC	ⅣC	ⅣC	ⅣC	ⅣC

③ 乳癌

5. 病期分類 と 進展度

1) UICC TNM 分類(第 8 版)

T-原発腫瘍【510】【610】

原発腫瘍の皮膚浸潤/胸壁浸潤の状況および最大径を評価する。

※ より進展している状況(乳癌では T4)に合致しているかを評価した上で、順に評価を行う。

①皮膚浸潤を理学的検査(視診/触診/聴診など)で評価する。

視診:皮膚潰瘍形成、浮腫(peau d'orange: 橙皮状皮膚を含む)、触診:皮膚衛星結節

②胸壁浸潤を理学的検査(視診/触診/聴診など)で評価する。

触診:胸壁(小胸筋、大胸筋は含まない)に固定して可動性がなくなる

③最大径をMMG(マンモグラフィ)、超音波検査、MRI等の画像診断で評価する。

※ pT:病理学的所見では手術標本の浸潤部分の最大径で測定する。

なお、生検などによる組織診で、非浸潤癌の診断があるときは、Tisとする。

Tis 上皮内癌

Tis(DCIS) 非浸潤性乳管癌

Tis(LCIS) 非浸潤性小葉癌

Tis(バジレット) 乳腺実質中の浸潤癌および/または上皮内癌とは関連のない乳頭のバジレット病。バジレット病と関連した乳腺実質中の癌は、その病変の大きさと性状で分類する。
その場合もバジレット病の存在は記載する。

T1 最大径が 2cm 以下の腫瘍

T1mi 最大径が 0.1cm 以下の微小浸潤^{注1}

T1a 最大径が 0.1cm をこえるが 0.5cm 以下

T1b 最大径が 0.5cm をこえるが 1cm 以下

T1c 最大径が 1cm をこえるが 2cm 以下

T2 最大径が 2cm をこえるが 5cm 以下の腫瘍

T3 最大径が 5cm をこえる腫瘍

T4 腫瘍の大きさに関係なく、胸壁および/または皮膚への直接的な広がりを示す腫瘍^{注2}

T4a 胸壁への広がり(胸筋浸潤のみは含まない)

T4b 潰瘍形成、同側乳房の衛星皮膚結節、または皮膚の浮腫(橙皮状皮膚を含む)

T4c 上記の T4a と T4b の両方

T4d 炎症性乳癌^{注3}

注1 微小浸潤とは基底膜をこえた周囲組織への癌細胞の広がり、最大径が 0.1cm をこえない病巣をいう。

注2 病理学的な真皮への浸潤所見だけで皮膚所見ありとはしない(理学的検査所見が必須)。胸壁は肋骨、肋間筋、および前鋸筋を含めるが、胸筋は含まない。

注3 炎症性乳癌は、癌細胞が皮膚のリンパ管を閉塞することによって起こる病態で、皮膚の乳房全体が固い硬結を示す状況で通常、腫瘍を伴わない。

表4 T因子《乳房》

		最大径	胸壁固定	皮膚所見
Tis			なし	なし
T1	T1mi	最大径 ≤ 0.1cm	なし	なし
	T1a	0.1cm < 最大径 ≤ 0.5cm	なし	なし
	T1b	0.5cm < 最大径 ≤ 1.0cm	なし	なし
	T1c	1.0cm < 最大径 ≤ 2.0cm	なし	なし
T2		2.0cm < 最大径 ≤ 5.0cm	なし	なし
T3		5.0cm < 最大径	なし	なし
T4	T4a	腫瘍最大径と無関係	あり	なし
	T4b	腫瘍最大径と無関係	なし	あり
	T4c	腫瘍最大径と無関係	あり	あり
	T4d	腫瘍最大径と無関係	炎症性乳癌の記載	

進んでいる
 割合から
 合致する64を
 下から上に
 確認していく

N-領域リンパ節転移【520】[620]

触診、超音波検査所見やCT所見などの画像診断所見をもとに、領域リンパ節転移を評価する。

臨床分類(cN)と病理学的分類(pN)は基準が違うので、注意する。

腋窩リンパ節の「可動」「固定」について特に記述ない場合は、「可動」と考えてcNを決定する。

領域リンパ節は、

- ① 同側 腋窩リンパ節(レベルⅠ、レベルⅡ)
- ② 同側 内胸リンパ節
- ③ 同側 鎖骨下リンパ節(腋窩リンパ節レベルⅢ*)
- ④ 同側 鎖骨上リンパ節

※ 鎖骨下LN(リンパ節) = 腋窩LNレベルⅢと考えてよい

表5 cN因子(臨床分類)《乳房》

UICC TNM 分類 【第8版】	腋窩リンパ節 (レベルⅠ、レベルⅡ)		内胸 リンパ節	鎖骨下 リンパ節 (レベルⅢ)	鎖骨上 リンパ節
	可動	固定			
cN0	なし	なし	なし	なし	なし
cN1	あり	なし	なし	なし	なし
cN2	cN2a	?	あり	なし	なし
	cN2b	なし	なし	あり	なし
cN3	cN3a	?	?	?	あり
	cN3b	可動/固定いずれか あり		あり	なし
	cN3c	?	?	?	?

進んでいる
 割合から
 合致する64を
 下から上に
 確認していく

「？」は、転移陽性/陰性いずれでもかまわない

表6 pN 因子(病理学的分類)《乳房》

UICC TNM 分類 【第8版】		腋窩リンパ節 (レベルⅠ、レベルⅡ)	内胸 リンパ節	鎖骨下 リンパ節 (レベルⅢ)	鎖骨上 リンパ節
pN0		なし	なし	なし	なし
pN1	pN1mi	0.2mm < 微小転移の大きさ ≤ 2.0mm または 2.0mm 以下の転移で細胞数 200 以上			
	pN1a	1~3 個	なし	なし	なし
	pN1b	なし	微小転移	なし	なし
	pN1c	1~3 個	微小転移	なし	なし
pN2	pN2a	4~9 個	なし	なし	なし
	pN2b	なし	あり	なし	なし
pN3	pN3a	10 個以上	なし	なし	なし
		?	?	1 個以上	なし
	pN3b	1 個以上	1 個以上	なし	なし
		4 個以上	微小転移	なし	なし
pN3c	?	?	?	1 個以上	

「？」は、転移陽性/陰性いずれでもかまわない

↑
進行している
具合から
合致するものを
下から上に
確認していく

M-遠隔転移【530】【630】

画像所見(CT/MRI、超音波検査)等から遠隔転移を評価する。

- M0** 遠隔転移なし
- M1** 遠隔転移あり

表 UICC TNM 分類【第8版】病期(Stage)のマトリクス《乳房》

UICC TNM8(乳房)	N0	N1mi	N1a-N1c	N2a,N2b	N3a-N3c
T0		IB	IIA	IIIA	IIIC
Tis	0				
T1mi, T1a-T1c	IA	IB	IIA	IIIA	IIIC
T2	IIA	IIB	IIIB	IIIA	IIIC
T3	IIB	IIIA	IIIA	IIIA	IIIC
T4a-T4d	IIIB	IIIB	IIIB	IIIB	IIIC
M1	IV	IV	IV	IV	IV

④ 肺癌

5. 病期分類と進展度

1) UICC TNM分類(第8版)

T-原発腫瘍【510】[610]

原発腫瘍の①腫瘍径、②直接浸潤、③肺内転移、④主気管支浸潤を評価する。

上記全てを評価して、表3 T因子変換表(肺)に当てはめ、一番進んでいる(数の大きい)T因子を選ぶ。

腫瘍径が4cm以下でT2a以下となり、他の要素でT2となった場合は、T2a

① 最大径(充実最大径:浸潤径)で評価

- 1) 1cm以下
- 2) 1cmを越え、2cm以下
- 3) 2cmを越え、3cm以下
- 4) 3cmを越え、4cm以下
- 5) 4cmを越え、5cm以下
- 6) 5cmを越え、7cm以下
- 7) 7cmを越える

② 直接浸潤

- | | |
|---|---------------------|
| 1) 肺内に限局し、臓側胸膜には達しない | 取扱い規約：PL0またはp10 |
| 2) 臓側胸膜に浸潤した状況 | 取扱い規約：PL1,2またはp11,2 |
| 3) 臓側胸膜を越え、壁側胸膜に浸潤 | 取扱い規約：PL3またはp13 |
| 4) 縦隔内の器官(脂肪組織を含む)に直接浸潤心臓、大血管、気管、反回神経、食道、椎体など | |

③ 肺内転移

- 1) 肺内転移なし
- 2) 原発巣と同側の同一肺葉
- 3) 原発巣と同側の異なる肺葉
- 4) 原発巣と対側の肺 ← 対側に肺内転移が存在する場合はT因子ではなく、M因子として評価(M1a)

④ 主気管支浸潤

← 片肺全摘(袖状切除等の特殊な手術ではなく)が可能かどうかを評価

- 1) 主気管支への浸潤なし、かつ肺門に及ぶ無気肺閉塞性肺炎なし
- 2) 気管分岐部への距離に関係なく主気管支に及ぶが、気管分岐部には及ばない
- 3) 片肺の一部もしくは全野に拡がる、肺門に及ぶ無気肺、または閉塞性肺炎あり
- 4) 気管分岐部に浸潤

- Tis** 上皮内癌^{※1}
- T1** 腫瘍の最大径が3cm以下で、健常肺組織、または臓側胸膜に囲まれているもの。気管支鏡的に癌浸潤が葉気管支より中樞に及ばないもの(すなわち、主気管支に及んでいないもの)^{※2}
- T1mi** 微小浸潤性腺癌^{※3}
- T1a** 最大径が1cm以下の腫瘍^{※2}
- T1b** 最大径が1cmをこえるが2cm以下の腫瘍^{※2}
- T1c** 最大径が2cmをこえるが3cm以下の腫瘍^{※2}
- T2** 3cmをこえるが5cm以下の腫瘍、または以下のいずれかの特徴をもつ腫瘍
- ・期間分岐部への距離に関係なく主気管支に及ぶが、気管分岐部には及ばない
 - ・臓側胸膜に浸潤する^{※4}
 - ・肺門に及ぶ無気肺、または閉塞性肺炎があり、片肺の一部もしくは全肺に及ぶ
- T2a** 最大径が3cmをこえるが4cm以下の腫瘍
- T2b** 最大径が4cmをこえるが5cm以下の腫瘍
- T3** 最大径が5cmをこえるが7cm以下の腫瘍、または壁側胸膜、胸壁(superior sulcus tumorを含む)、横隔神経、壁側心膜のいずれかに直接浸潤する腫瘍、または原発と同一肺葉に不連続の副腫瘍結節のあるもの
- T4** 7cmをこえる腫瘍、または大きさと無関係に横隔膜、縦隔、心臓、大血管、気管、反回神経、食道、椎体、気管分岐部に浸潤する腫瘍、原発と同側別肺葉に不連続の副腫瘍結節のあるもの

※1 Tisには腺癌と扁平上皮癌の上皮内癌が含まれる。

※2 大きさと無関係に腫瘍の浸潤が気管支内に局限している稀な表層浸潤型のもは、腫瘍が主気管支に及ぶものでもT1aとする。

※3 孤立性の腺癌(最大径3cm以下)で、主に肺胞上皮置換性進展を示し、浸潤性増殖を示す部分の最大径が5mm以下のもの。

※4 これらの特徴を有するT2の腫瘍が4cm以下であれば大きさが特定できない場合はT2a、4cmをこえるが5cm以下の場合はT2bと分類する。

表3 T因子—変換表《肺》

		充実最大径	直接浸潤	主気管支浸潤		肺内転移
				気管支鏡所見	肺門に及ぶ 無気肺 [※]	
T1	T1a	腫瘍径 ≤ 1cm	胸膜に及ぶ 浸潤なし	浸潤なし	なし	なし
	T1b	1cm < 腫瘍径 ≤ 2cm	胸膜に及ぶ 浸潤なし	浸潤なし	なし	なし
	T1c	2cm < 腫瘍径 ≤ 3cm	胸膜に及ぶ 浸潤なし	浸潤なし	なし	なし
T2	T2a	3cm < 腫瘍径 ≤ 4cm	または 臓側胸膜	または 浸潤あり	または あり	なし
	T2b	4cm < 腫瘍径 ≤ 5cm	または 臓側胸膜	または 浸潤あり	または あり	なし
T3		5cm < 腫瘍径 ≤ 7cm	または 壁側胸膜	—	—	同側 同一肺葉
T4		7cm < 腫瘍径	または 縦隔内	または 分岐部に浸潤	—	同側 他肺葉

※ 無気肺ではなく、閉塞性肺炎と記載される場合もある。

※ 取扱い規約のPL3またはp3に含まれる「横隔膜への浸潤」は、T4に分類する。

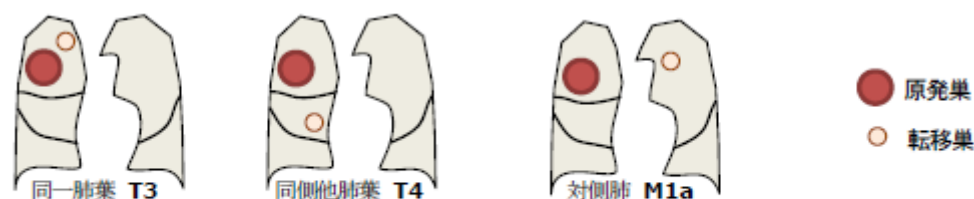


図6 肺内転移のパターン



図7 主気管支浸潤のパターン

【T分類補足】(肺がん取扱い規約第8版抜粋)

- 1). T1mi (微小浸潤性腺癌) とは、主に肺胞置換型進展を示す、すりガラス成分を含めた腫瘍全体の最大径 ≤ 3cm の孤立性腺癌であり、中心の浸潤性増殖を示す部分(充実成分)の最大径がいずれも 0.5cm 以下のものを示す。
- 2). 声帯麻痺(迷走神経の反回神経枝への浸潤による)、あるいは上大静脈閉塞、また気管や食道への浸潤は T4 に分類する。原発巣が抹消にあり反回神経麻痺がリンパ節によると考えられる場合は T4 とはしない。
- 3). 高分解能 CT にてすりガラス型の病変で、最大径 ≤ 3cm のものは Tis、病変全体径 > 3cm のものは T1a とする。

N-領域リンパ節転移【520】【620】

肺癌の領域リンパ節は、①肺内リンパ節、②肺門リンパ節、③縦隔リンパ節(同側正中)、④縦隔リンパ節(対側)、⑤肺門リンパ節(対側)、⑥肺内リンパ節(対側)、⑦鎖骨上・前斜角筋リンパ節

これらを、表4のように分類して、

- | | | |
|-----------------|-----------|---------------------------------|
| 1) 同側 肺内・肺門リンパ節 | N1 | リンパ節番号 #10～#14 |
| 2) 同側・正中 縦隔リンパ節 | N2 | リンパ節番号 #2～#9 |
| 3) それ以外の領域リンパ節 | N3 | リンパ節番号 #1 または前斜角筋リンパ節、対側の領域リンパ節 |

上記全てを評価して、表4 N因子対応表(肺)に当てはめ、一番進んでいる(数の大きい)N因子を選ぶ。

N0 領域リンパ節転移なし

N1 同側気管支周囲、

および/または同側肺門および肺内リンパ節の転移で、原発腫瘍の直接浸潤を含む

N2 同側縦隔リンパ節転移、および/または気管分岐下リンパ節の転移

N3 対側縦隔、対側肺門、同側または対側前斜角筋、鎖骨上のリンパ節転移

表4 N因子対応表《肺》

UICC TNM 分類での領域リンパ節名		取扱い規約でのリンパ節番号	取扱い規約でのリンパ節名	備考
N3	頸部・鎖骨上リンパ節	番号なし	前斜角筋リンパ節	
		* #1 (LR)	鎖骨上リンパ節	付番変更
N2	縦隔リンパ節	#2 (LR)	上部気管傍リンパ節	
		* #3	血管前・気管後リンパ節	
		* #3a	血管前リンパ節	
		#3p	気管後リンパ節	
		#4 (LR)	下部気管傍リンパ節	
		#5	大動脈下リンパ節	左縦隔のみ
		#6	大動脈傍リンパ節	左縦隔のみ
		#7	気管分岐下リンパ節	
		#8	食道傍リンパ節	
		#9	肺靭帯リンパ節	
N1	肺門リンパ節	#10	主気管支周囲リンパ節	
		#11	葉気管支間リンパ節	
	肺内リンパ節	#12	葉気管支周囲リンパ節	従来は肺門リンパ節に分類
		#13	区域気管支周囲リンパ節	
		#14	亜区域気管支周囲リンパ節	

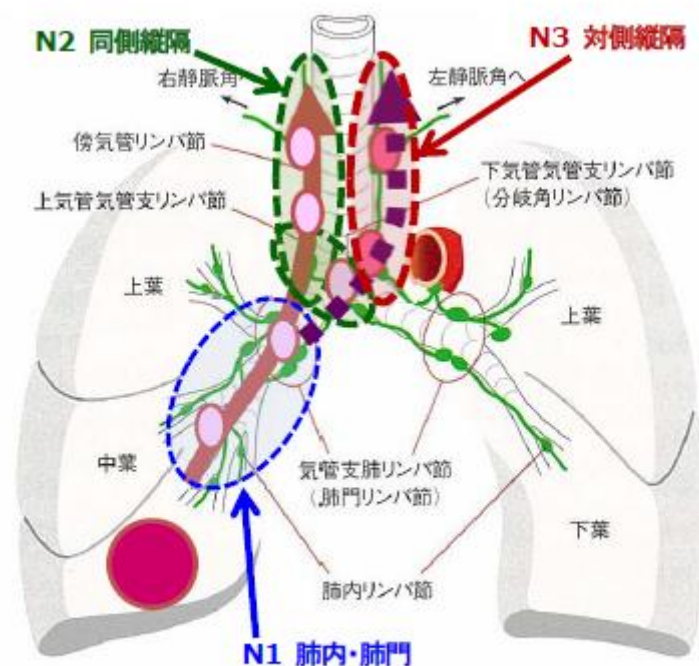


図8 肺癌の領域リンパ節

M-遠隔転移 【530】【630】

画像所見(CT/MRI、超音波検査)等から遠隔転移を評価する。

M0 遠隔転移なし

M1 遠隔転移あり

M1a 対側肺葉の副腫瘍結節

胸膜または心膜の結節、悪性胸水、悪性心嚢水を伴う腫瘍

M1b 1臓器への単発胸郭外転移

M1c 1臓器または多臓器への多発胸郭外転移

表 UICC TNM分類【第8版】病期(Stage)のマトリクス《肺》

TNM分類第8版 (ステージ)	N0	N1	N2	N3
TX	潜伏癌			
Tis	0			
T1	IA			
T1mi	IA1			
T1a	IA1	II B	III A	III B
T1b	IA2	II B	III A	III B
T1c	IA3	II B	III A	III B
T2a	IB	II B	III A	III B
T2b	IIA	II B	III A	III B
T3	II B	III A	III B	III C
T4	III A	III A	III B	III C
M1	IV	IV	IV	IV
M1a-M1b	IVA	IVA	IVA	IVA
M1c	IVB	IVB	IVB	IVB

⑤肝癌 《肝細胞癌》

5-1 肝細胞癌

T-原発腫瘍《肝細胞癌》【510】【610】

原発腫瘍の①胆嚢以外の隣接臓器直接浸潤、②臓側腹膜の貫通、③門脈への侵襲、④肝静脈への侵襲、および⑤個数、⑥腫瘍(最大)径を評価する。

上記すべてを評価して、表4 T分類早見表《肝細胞癌》に当てはめ、一番進んでいる(数の大きい)T分類を選ぶ。

①胆嚢以外の隣接臓器への直接浸潤

- 1) なし
- 2) あり

②臓側腹膜を貫通

- 1) なし
- 2) あり

③門脈侵襲

- 1) vp0 門脈侵襲なし
- 2) vp1 門脈3次分枝まで侵襲
- 3) vp2 門脈2次分枝まで侵襲
- 4) vp3 門脈1次分枝まで侵襲
- 5) vp4 門脈本幹まで侵襲

④肝静脈侵襲

- 1) vv0 肝静脈侵襲なし
- 2) vv1 肝静脈末梢枝まで侵襲
- 3) vv2 右肝静脈、中肝静脈、左肝静脈まで侵襲
- 4) vv3 下大静脈まで侵襲

⑤個数

- 1) 単発 1個
- 2) 多発 2個以上

⑥腫瘍(最大)径

- 1) 単発 2cm以下
- 2) 単発 2cmを超える
- 3) 多発 5cm以下
- 4) 多発 5cmを超える

T1a 血管侵襲有無に関係なく、最大径が2cm以下の単発腫瘍

T1b 血管侵襲を伴わず、最大径が2cmをこえる単発腫瘍

T2 血管侵襲を伴い最大径が2cmをこえる単発腫瘍、または最大径が5cm以下の多発腫瘍

T3 最大径が5cmをこえる多発腫瘍

T4 門脈もしくは肝静脈の大分枝^{*)}に浸潤する腫瘍、
または胆嚢以外の隣接臓器(横隔膜を含む)に直接浸潤する腫瘍、
または臓側腹膜を貫通する腫瘍

※大分枝とは、門脈ではvp3 vp4、肝静脈ではvv2 vv3の範囲をさす。

表4 〈UICC 第8版T分類早見表〉《肝細胞癌》

取扱い規約による記載情報				腫瘍の形態(腫瘍数・腫瘍径)			
				単発		多発	
				最大径 ≤ 2cm	2cm < 最大径	最大径 ≤ 5cm	5cm > 最大径
脈管侵襲・その他	門脈・肝静脈への侵襲なし						
	門脈	侵襲なし	Vp0	T1a	T1b	T2	T3
	かつ						
	肝静脈	侵襲なし	Vv0				
	門脈または肝静脈の区域枝までの浸潤						
	門脈	第2次より末梢(第3次分枝)または第2次分枝に侵襲	Vp1 Vp2	T1a	T2	T2	T3
または	肝静脈	末梢枝に侵襲	Vv1				
門脈の区域枝、または肝静脈本幹に及ぶ浸潤							
門脈	第1次分枝または門脈本幹または対側門脈侵襲	Vp3 Vp4	T4	T4	T4	T4	
または	肝静脈	右・中・左静脈本幹など、下大静脈に侵襲	Vv2 Vv3				
臓側腹膜を貫通				T4	T4	T4	
胆嚢以外の隣接臓器への浸潤				T4	T4	T4	

② Vp, Vv を導き出す

③ 単発・多発、最大径を評価

① 左記の状況があれば T4

N-領域リンパ節《肝細胞癌》【520】【620】

N0 領域リンパ節転移なし

N1 領域リンパ節転移あり

【UICCにおける領域リンパ節】《肝細胞癌》

肝門部リンパ節、肝臓リンパ節(固有肝動脈に沿うもの)、傍門脈リンパ節(門脈に沿うもの)、および大静脈リンパ節である。

表5 UICC 領域リンパ節と取扱い規約の対照表《肝細胞癌》

肝癌取扱い規約(6版)リンパ節名称	リンパ節番号	UICC 8版	UICC 8版名称	備考
肝十二指腸間膜内リンパ節	12	領域	肝門部リンパ節、固有肝動脈周囲リンパ節、門脈周囲リンパ節	
大動脈周囲リンパ節	16	領域	下大静脈リンパ節	
		領域	下横隔リンパ節	対応番号なし

M-遠隔転移 《肝細胞癌》【530】【630】

M0 遠隔転移なし

M1 遠隔転移あり

表 UICC TNM分類【第8版】病期(Stage)のマトリクス《肝細胞癌》

UICC TNM8(肝細胞癌)	N0	N1
T1a	IA	IVA
T1b	IB	IVA
T2	II	IVA
T3	III A	IVA
T4	III B	IVA
M1	IV B	IV B

《肝内胆管癌》

5-2 肝内胆管癌

T-原発腫瘍《肝内胆管癌》【510】【610】

原発腫瘍の①臓側腹膜を超えた直接浸潤、②臓側腹膜の貫通、③門脈への侵襲、④肝静脈への侵襲、および⑤個数、⑥腫瘍(最大)径を評価する。

上記すべてを評価して、表10 T分類早見表《肝内胆管癌》に当てはめ、一番進んでいる(数の大きい)T分類を選ぶ。

①側腹膜を超えた直接浸潤

- 1) なし
- 2) あり

②側腹膜の貫通

- 1) なし
- 2) あり

③門脈侵襲

- 1) vp0 門脈侵襲なし
- 2) vp1 門脈3次分枝まで侵襲
- 3) vp2 門脈2次分枝まで侵襲
- 4) vp3 門脈1次分枝まで侵襲
- 5) vp4 門脈本幹まで侵襲

④肝静脈侵襲

- 1) w0 肝静脈侵襲なし
- 2) w1 肝静脈末梢枝まで侵襲
- 3) w2 右肝静脈、中肝静脈、左肝静脈まで侵襲
- 4) w3 下大静脈まで侵襲

⑤個数

- 1) 単発 1個
- 2) 多発 2個以上

⑥腫瘍(最大)径

- 1) 単発 5cm以下
- 2) 単発 5cmをこえる

Tis 上皮内癌(胆管内腫瘍)

T1a 血管侵襲を伴わず、最大径が5cm以下の単発腫瘍

T1b 血管侵襲を伴わず、最大径が5cmをこえる単発腫瘍

T2 肝内血管侵襲を伴う単発腫瘍、または血管侵襲の有無に関係なく多発腫瘍

T3 臓側腹膜を貫通する腫瘍

T4 直接的な肝浸潤により局所的肝外構造に浸潤する腫瘍

表10 (UICC 第8版T分類早見表)《肝内胆管癌》

取り扱い規約による記載情報 Vp, Vv を導き出す ③				腫瘍の形態(腫瘍数・腫瘍径)		
				単発		多発
				最大径 ≤ 5cm	5cm < 最大径	④ 単発・多発・最大径を評価
脈管類 その他	門脈・肝静脈への侵襲なし					
	門脈 侵襲なし	Vp0	T1a	T1b	T2	
	かつ 肝静脈 侵襲なし	Vv0				
	門脈または肝静脈の区域枝までの浸潤					
	門脈 第2次より末梢(第3次分枝) または 第2次分枝に侵襲	Vp1 Vp2	T2	T2	T2	
	肝静脈 末梢枝に侵襲	Vv1				
門脈の区域枝、または肝静脈本幹に及ぶ浸潤						
門脈 第1次分枝または 門脈本幹または対側門脈侵襲	Vp3 Vp4	T2	T2	T2		
または 肝静脈 右・中・左静脈本幹など、 下大静脈に侵襲	Vv2 Vv3					
臓側腹膜を貫通した腫瘍			T3	T3	T3	② 左記の状況があれば
隣接臓器への直接浸潤			T4	T4	T4	① 左記の状況があれば

N-領域リンパ節《肝内胆管癌》【520】【620】

- N0 領域リンパ節転移なし
- N1 領域リンパ節転移あり

【UICCにおける領域リンパ節】《肝内胆管癌》

《肝右葉》 肝門部リンパ節(総胆管、肝動脈、門脈、胆嚢管)、十二指腸周囲リンパ節、膵周囲リンパ節

《肝左葉》 肝門部リンパ節(総胆管、肝動脈、門脈、胆嚢管)、胃肝の各リンパ節

※ 腹腔動脈幹リンパ節、または大動脈周囲リンパ節、
あるいは大静脈周囲リンパ節への転移は遠隔転移「M1」の扱いとなる

表11 UICC 領域リンパ節と取扱い規約の対照表 《肝内胆管癌》

肝癌取扱い規約(6版)		右肝内胆管癌		左肝内胆管癌	
リンパ節名称	リンパ節番号	UICC 8 版	UICC8版リンパ節名称	UICC 8 版	UICC8版リンパ節名称
右噴門リンパ節	1			領域	胃肝
小弯リンパ節	3			領域	胃肝
左胃動脈幹リンパ節	7			領域	胃肝
総肝動脈幹リンパ節	8			領域	胃肝
肝十二指腸間膜内リンパ節	12	領域	肝門部、十二指腸周囲	領域	肝門部
膵頭後部リンパ節リンパ節	13	領域	膵臓周囲		
膵頭前部リンパ節	17	領域	膵臓周囲		

M-遠隔転移 《肝内胆管癌》 【530】【630】

M0 遠隔転移なし

M1 遠隔転移あり

表 UICC TNM分類【第8版】病期(Stage)のマトリクス 《肝内胆管癌》

UICC TNM8 (肝内胆管癌)	N0	N1
Tis	0	
T1a	IA	ⅢB
T1b	IB	ⅢB
T2	II	ⅢB
T3	ⅢA	ⅢB
T4	ⅢB	ⅢB
M1	IV	IV